

ナショナル・アイデンティティの行方 —人種・文化・民族・歴史・政治の視点から

木内 徹*・三輪信吾*・山内 淳**・中里壽明***・福島 昇*・堀 邦維**
ジュリアン マニング****・舘野正美*****・楠家重敏*****

The Destination of National Identity in the World: From the Perspective of Race, Culture, Ethnicity, History, and Politics

*Toru KIUCHI**, *Shingo MIWA**, *Atsushi YAMAUCHI***, *Toshiaki NAKAZATO****,
*Noboru FUKUSHIMA**, *Kunishige HORI***, *Julian MANNING*****,
*Masami TATENO***** and Shigetoshi KUSUYA******

Our research on national identity in the world is a brief, critical look at the current situation of the destiny of national identity in the United States, Germany, France, England, Ireland, Taiwan, and South Korea from the perspective of race, culture, ethnicity, history, and politics.

One of the most instrumental doctrines in history is that all humans are divided into a variety of nations. This is a starting point for the ideology of nationalism. A nation is a group of human beings who share a common racial, ethnic, sociological, cultural, historical, and political identity, and also share a common language, religion, culture, and history. In addition, they all have a common origin, ancestry, and descent.

National identity is relevant to the features of the ethnic group, as well as to the individual's sense of belonging to it. Members of a nation are assumed to share certain traits, values, and standards of behavior. Our research on national identity in the United States, Germany, France, England, Ireland, Taiwan, and South Korea is a discrete study directed toward the actions of the members of a single nation—one which is a historically comprised, established community of people built up on the basis of a common language, territory, economic life, and psychological disposition shared by a common culture.

Keywords: National Identity, Race, Culture, Ethnicity, History

*日本大学生産工学部教養・基礎科学系教授

**日本大学芸術学部教授

***日本大学生物資源科学部教授

****日本大学芸術学部助教授

*****日本大学文理学部教授

*****杏林大学外国語学部教授

I. はじめに

私たち9名は、平成17年度、18年度の2年間にわたって、日本大学学術助成金（総合研究）の助成を受け、日本、台湾、韓国、ドイツ、フランス、イングランド、アイルランド、北アイルランド、そして、アメリカ合衆国（東部地域、南部地域）など、世界における、ナショナル・アイデンティティ（国民性）の行方の研究を、人種・文化・民族・歴史・政治の視点から行った。

世界の工業先進国、特に日欧米アジアにおける国民としての意識は、冷戦構造の崩壊、9/11同時多発テロ事件など、時代の変遷とともに近年とみに変化しつつある。そして21世紀はそのような変化が、世界情勢に大きな影響を与えるようになっている。この国民意識の変化を、過去から現在にわたって総合的に精査することによって、世界の行方、ならびに日米欧アジアの各国の行方を予知し、今後の日欧米アジアにおける国民としての意識は、冷戦構造の崩壊、9/11同時多発テロ事件などによる変化にどのように対応していけばよいかの指針を示すことを目的とした。

日本、東アジア、欧州のナショナル・アイデンティティを、人種・文化・民族・歴史・政治の視点から、総合的に明らかにすることによって、世界の動向を探る研究は、過去に例がなく、きわめて独創的な結果が得られた。その結果は、日米欧アジアのナショナル・アイデンティティの行方として、今後ますます各国の国民的に少数者の視点、たとえば移民などの視点が大きく関わってくることと思われる。

特にヨーロッパはすでにEU（欧州連合）として統一を強め、グローバル化を進展させつつも、それぞれの国民性を保持していくものと思われる。ここにヨーロッパのナショナルアイデンティティをさぐる意味が見出される。なかでもプロテスタントとカトリックの紛争が絶えなかった北アイルランドは探求の意義は大きい。特に、アメリカ合衆国においては、多文化主義の影響で、ナショナルアイデンティティをさぐる意味は大きいものとなる。

さらに、東アジア・日本は、それぞれ独自の環境の中で各国人としての国家における自分の位置の意識を変化させていくものと思われる。これらを総合的に比較検討して、世界の動向をさぐり、その結果日本がどのような立場をとるべきかをも探るものである。

具体的には、日本の将来予測、および国民性の研究のため、研究分担者各自が世界各地におもむき、現地調査・資料収集を行い、人種・文化・民族・歴史・政治の視点から、世界に起こっているナショナル・アイデンティティ（国民性）の変化を研究した。その方法は、研究分担者が各自できりひらいた人脈と調査方法によって、社会を形

成する多層にわたる世代にインタビューし、それをまとめた。本助成金の研究代表者および分担者は、平成17年の年度内に、以下のような各国へ個別実地調査・資料収集におもむき、平成18年度は収集した情報や資料によって、研究成果をまとめた。

II. 平成17年度個別研究実施報告

以下のとおり、本研究分担者は、それぞれ、アメリカ東部地域、フランスのブルターニュ地方、アイルランドのダブリンとスコットランドのエディンバラ、ブリテンと北アイルランド諸国、イングランド、台湾・韓国におもむき、これまでにそれぞれがつちかった各国におけるネットワークを使って大学関係者にインタビューを行い、さらに一般市民に対してもインタビューを行った。現地における風俗習慣、出版物、文化の動向、社会現象、民族問題、宗教性などを現地調査し、さらに、日本へそれぞれの調査結果を持ち寄って、日米欧のナショナル・アイデンティティの行方を国際比較することによって、人種・文化・民族・歴史・政治の視点から、世界の行方を予測した。

日本の将来予測、および国民性の研究のため、研究分担者各自が世界各地におもむき、現地調査・資料収集を行い、人種・文化・民族・歴史・政治の視点から、世界に起こっているナショナル・アイデンティティ（国民性）の変化を研究した。その方法は、研究分担者が各自できりひらいた人脈と調査方法によって、社会を形成する多層にわたる世代にインタビューし、それをまとめた。本助成金の研究代表者および分担者は、平成17年8月あるいは年度内に、次の通りの各国へ個別実地調査・資料収集におもむいた。

(1) 木内 徹（研究代表者）

平成17[2005]年8月4日から8月26日まで、アメリカ合衆国各地に滞在し、大学教員や一般市民にインタビューし、また黒人大学の教員・学生にインタビューし、黒人の目から見たアメリカの国民性を明らかにした。また、国民性の集大成である大衆文化に関する資料、国民性に関する書籍などの収集に努めた。

(2) 三輪信吾（研究分担者）

平成17(2005)年8月4日から26日まで、ドイツのマインツ市に滞在し、ヨハネス・グーテンベルク大学関係者および一般市民に、将来のEU加盟国の問題を中心に意識調査を行った。とくに、東方拡大がどこまで可能か、具体的にはイスラム国家であるトルコ共和国の加盟がなるかどうかには焦点をあてた。EUの将来像については、「中世ヨーロッパ」の復活、「神聖ローマ帝国」あるいは「古代ローマ帝国」の再現など、いろいろな見方があるが、これに「啓蒙のヨーロッパ」を加えておきたい。18世紀

のヨーロッパは、啓蒙主義のもと、理性を旨とし、宗教に寛容であったが、これは思想界に限られたことで、政治の世界には及ばなかった。もし、トルコがフルメンバーとなれば、この啓蒙のヨーロッパが政治的にも実現することになる。トルコ加盟問題は、EUの行方をうらなう試金石ともなるであろう。

(3) 山内 淳 (研究分担者)

平成17(2005)年8月4日から8月26日までの間にフランスのブルターニュ地方に行き、主にナントやレンヌそしてロリアンの町々を訪れ、16世紀初頭にフランス共和国に併合されたブルターニュ地方に色濃く残るケルトアイデンティティとナショナリズムの関係を調べた。滞在中は地元の人々にインタビューし、また資料の収集をした。

(4) 中里壽明 (研究分担者)

平成17(2005)年8月24日から9月14日までの間に、University College Dublinを中心としたアイルランドの現地調査およびUniversity of Edinburghを中心としたスコットランドの現地調査を実施し、教育制度、民衆文化、演劇の各分野におけるアイルランドの特殊性(Irishness)とスコットランドの特殊性(Scottishness)を明らかにした。大学関係者(Cambridge Universityの関係者をも含む)や一般民衆に対するこれらの聞き取り調査によって、イギリス文化におけるイギリス性(Englishness)が、イギリス文化に内在するアイルランド性(Irishness)、スコットランド性(Scottishness)との相関関係によって明らかになった。

(5) 福島 昇 (研究分担者)

平成17(2005)年8月2日から8月23日まで、ブリテン、北アイルランド諸国を回り、大学教員や一般市民にインタビューした。北アイルランドのベルファストでは、プロテスタントとカトリックにインタビューし、双方から見た北アイルランドの国民性を明らかにした。さらに、デリー(ロンドンデリー)で起きた「血の日曜日事件」の現場を訪れ、現地の人にインタビューし、北アイルランドのナショナル・アイデンティティを解明した。

(6) 堀 邦維, およびジュリアン マニング(Julian Manning) 共通 (研究分担者)

平成17(2005)年8月4日から26日まで、イギリスへ赴き、ヘゲモニーとエスニック・レジスタンスをテーマとして、現地調査・資料収集を行った。その調査内容(キーワード)は、マイノリティ・アイデンティティ、文化的アイデンティティ、文化象徴の歴史的な発展、移民研究などである。計画として、戦後英国におけるカリブ海出身者(旧植民地からの)の流入による文化的ゆきぶり、つまり英国のナショナル・アイデンティティに対して常に少数者であるカリブ海出身者たちの自己意識の顕在化を、エスニック・レジスタンスとしてのノッティングヒ

ル・カーニバルを中心に取材することによって明らかにした。この研究を通じて得られた知見は、日本が現在迎えている多文化的状況(各地の在日ブラジル人の文化活動)を考える上でも十分に応用可能である。

(7) 館野正美 (研究分担者)

平成17(2005)年8月24日～9月2日に、台湾・韓国を訪れ、大学関係者・一般市民にインタビューし、彼らの国民性とそこに映ぜられる日本人の国民性を双方向的に明らかにした。

(8) 楠家重敏 (研究分担者)

平成17(2005)年8月4日から26日まで、イギリスのロンドンを訪れ、イギリス人外交官・日本研究家ウィリアム・ジョージ・アストンに関する資料収集を行った。イギリスのケンブリッジ大学総合図書館にあるアストンの和書の膨大なコレクション調査のうち、ロンドンの公文書館でアストンの活動をつぶさに調べ、アストンゆかりのロンドンの地を訪れ、家系調査と遺言状調べをした。以上の資料収集・現地調査を通じて、イギリス人の日本研究を通して、そこに映じたイギリス人の国民性を研究した。

III. 平成18年度個別研究成果報告

1. アメリカ合衆国の場合

木内 徹

平成17(2005)年8月4日から8月26日まで、アメリカ合衆国各地に滞在し、大学教員や一般市民にインタビューし、またアフリカン・アメリカンの大学教員・学生にインタビューし、アフリカン・アメリカンの目から見たアメリカの国民性を明らかにした。また、国民性の集大成である大衆文化に関する資料、国民性に関する書籍などの収集に努めた。平成18年度は、引き続き資料収集につとめるとともに、集積した情報を総合的に分析した。以下は、収集した資料のほんの一端について紹介するものである。

1989年11月9日ベルリンの壁は、28年ぶりに事実上崩壊した。この直後から、ドイツ統一要求が表面化し、10月3日、東ドイツは西ドイツに加盟、ここに人口7800万人の統一ドイツが成立した。これによって冷戦は終結した。

冷戦時においては、米ソという超大国が二国あり、そのどちらかの陣営で自国の安全を守ろうとした。しかし、2006年までのこの16年のあいだ、冷戦構造解体後の世界で、「自分の国は自分で守る」という発想転換の戦略をとらざるを得なくなった。その結果、それぞれの国がナショナルアイデンティティを再構築する必要に迫られ

たのである。ナショナル・アイデンティティーの再構築という問題に関しては、アメリカも例外ではなく、ナショナリズムを強めていくという傾向があった。

こうしたアメリカのナショナル・アイデンティティーの大きな変化を早くも指摘したのは、『多文化主義のアメリカ揺らぐナショナル・アイデンティティー』²¹⁾である。そして、その後、名著『文明の衝突』の著者サミュエル・ハンチントン²²⁾は、その近著『分断されるアメリカ』²³⁾のなかで、東西冷戦が終焉を迎えた後の世界を予測し、アメリカ人のナショナル・アイデンティティーに生じた変化を分析している。アメリカ人は、マニフェスト・デスティニー、つまり「明白な運命、あるいは天命」などと訳されるアメリカ拡張主義思想、アメリカ合衆国の拡大を倫理的に正当化した思想に基づいて、大陸帝国建設を行ってきた。こうした考え方は、辺境消失によって地理的限界を越え、海外へも進出する帝国主義をも正当化する思想として役割を果たしてきた。そのため、20世紀の「アメリカ合衆国国際警察論」や、「世界の指導者説」などにいたるのである。

だが、このイデオロギーは、近年にいたって、毎年、何十万人もの移民が押し寄せ、国の統一感を失う結果ともなった。特に、スペイン語を母語とし、米文化になじもうとしないヒスパニック系住民の増加で、米国は二分化される恐れがあるとハンチントンは指摘する。いまや、全人口の13%を占めていたアフリカン・アメリカンの割合をスペイン語を母語とするヒスパニック系が上回ってしまったという現実がある。アメリカ合衆国は、当然と思われてきた、過去3世紀半にわたって引き継いできたワスプ、つまりアングロ・プロテスタントの文化、伝統、価値観を失いつつある、とハンチントンは指摘している。

ワナー・ソラーズは、「ナショナル・アイデンティティーと民族的多様性」²⁴⁾のなかで、マサチューセッツ州プリマスにある、巡礼の父祖たちがメイフラワー号で到して最初に足をかけた岩、アメリカ到着記念史蹟プリマスロックを、アメリカのナショナル・アイデンティティーの本来の本家本元と解釈している。そして、初めて植民したヴァージニア州ジェームズタウンを、さらにナショナル・アイデンティティーの基礎中の基礎としている。しかし、ナショナル・アイデンティティーの変化は、1892年から1943年まで、すべての移民が手続きをとらねばならなかった移民局があったニューヨークの小さな島、エリス島からすべて始まったと見ている。移民は常にアメリカ人のナショナル・アイデンティティーを変化させてきたとソラーズは見ている。

リチャード・メルマン著『黒人文化の表象』²⁵⁾は、アメリカの人種関係におけるアフリカン・アメリカン文化が果たす役割を鋭く分析している。著者メルマンは、映画、文学、大衆文化（音楽など）、教育、テレビ番組、

そして政府の文化政策にいたるまで、実例をもって分析し、白人ばかりでなく、アフリカン・アメリカンもアメリカ文化の主流にいかにか黒人文化を投影させてきたかを注意深く考察している。メルマンは、さらに、この投影がアメリカのナショナル・アイデンティティーを変化させ、人種間の対立を緩和していると論じている。アメリカ人、およびアメリカ合衆国のナショナル・アイデンティティーの形成にアフリカン・アメリカンの役割がいかに大きかったかを詳細に分析している。

2. ドイツ連邦共和国の場合

三輪信吾

2.1 はじめに

本稿は統合ヨーロッパの将来を左右する問題の一つがナショナル・アイデンティティの行方であるという立場から、EU加盟国中最大の経済規模を有するドイツ連邦共和国（以下ドイツと表記）の場合について、歴史と政治の視点から検証しようとするものである。なお、以下においてはナショナル・アイデンティティを主張する立場をナショナリズムと定義し、世界主義と対比させた。

2.2 歴史の視点から

ドイツのナショナリズムの消長を歴史の視点から見ておきたい。日本ではナチスのイメージが強く、最も有名なドイツ人ということでアンケートをとると、ヒトラーが第1位となることが多い。ドイツといえば、ナショナリストの国という印象が強いのである。しかし実際は、必ずしもそうではない。ナショナリズムの時代と、そうでない時代とが交互に繰り返されるという歴史のプロセスを経ている。

1760年代の後半から70年代の前半、ゲーテの青年時代に「疾風怒涛 (Sturm und Drang)」と呼ばれる運動が主として文学の分野から啓蒙主義に抗して生まれる。この運動は後のロマン主義と比べれば小さいとはいえ、ここでモーザーが初めて国民精神 (Nationalgeist) という言葉を使い、若いゲーテの指導者となったヘルダーが広く国民的な基礎に立つ国民文化の必要性を強調した。プロイセンのフリードリヒ大王が7年戦争に勝利した後のこの時期、今日的な意味でのナショナリズムがはじめて誕生したのである。R.R. アーガンは、『ヘルダーとドイツ・ナショナリズムの基礎』(1966)において、「ヘルダーがナショナリズムの哲学を大枠で公式化したといえる」と書いている。

次に続くのが古典主義の時代である。1780年代から90年代を中心とするこの時代は、ドイツ文化の黄金期であった。文学ではゲーテ、シラー、哲学ではカント、音楽ではハイデン、モーツァルトが活躍した。彼らに共通なのは人間主義、いわゆるヒューマニズムであり、普遍

的な人間像である。ここにおいて、ナショナリズムは影をひそめる。ヘルダーも「人間性促進のための書簡」を書いて古典主義者の一員となる。カントの『永遠平和のために』(1795)は、ナショナリズムの偏狭さを免れたこの時代を代表する著作として、最近では日本の憲法改正にからんで取り上げられることも多い。しかし国際連合や世界市民というカントの提案は、次のような厳しい背景のもとでなされていることも忘れてはならない。「一緒に生活する人間の間の平和状態は、なんら自然状態ではない。自然状態は、むしろ戦争状態である。言いかえれば、それはたとえ敵対行為がつねに生じている状態ではないにしても、敵対行為によってたえず脅かされている状態である」。

これに続くロマン主義は大きく前期と後期に分けられなければならない。ロマン主義は一般にナショナリズムと結びつくと言われている。しかしドイツの初期ロマン主義は時代的に古典主義と重なる部分があるのみでなく、思想的に重なる部分もある。たとえばフリードリヒ・シュレーゲルは、ギリシア美術を賛美したヴィンケルマンの役割を文学の分野で果たすことを目的としたし、ノヴァーリスはキリスト教によってではあるが、ヨーロッパの一体化を望んだ。ナショナリズムが強く現れるのは、後期ロマン主義である。きっかけはナポレオンのフランスからドイツを解放しようとする、いわゆる解放戦争であり、フィヒテの有名な『ドイツ国民に告ぐ』がその代表である。当時のドイツは、その大部分がナポレオンの支配下にあったので当然といえる。

このように古典主義とロマン主義はドイツの2大芸術様式であるのみならず、思想史あるいは政治史的にみても重要な位置をしめる。どの国も大なり小なりこの2つの傾向を併せ持つのであるが、どちらをより重要と考えるかによって、その国に対する見方が大きく異なってくる。ドイツの場合、すでにみたように、ロマン主義を狂信主義(fanaticism)へと推し進めたヒトラーの影響が大きく、日本では、少なくとも政治的には、ロマン主義優勢の見方が多いが、実際は四つに組んだようなもので、容易に軍配をあげ得ないのである。

第1次世界大戦敗北後、かつての古典主義の聖地を拠点にワイマール共和国が成立し、世界主義の理想が求められる。しかし莫大な賠償を課すなど、戦勝国の対応のまずさもあって、うまく機能せず、1929年の大恐慌や共産革命の脅威も手伝って、ナチスの台頭を許すことになる。これはナショナリズムの極致というより、まさしく狂信主義であり、1000年続くと標榜した第3帝国は、わずか10年余りで瓦解することになった。戦後、第1次世界大戦後の国際連盟での失敗を教訓に国際連合が誕生し、ヨーロッパではEUへといたる礎石である、ヨーロッパ石炭鉄鋼共同体が、1951年に設立された。敗戦とともに

に東西に分割されたドイツでは、過去の反省や冷戦の最前線に置かれた緊張感もあり、ナショナリズムは姿を消した。しかし東西冷戦の終焉後、ベルリンの壁の崩壊、統一ドイツの成立で緊張感がほぐれると、旧東ドイツを中心にネオナチという形でナショナリズムが復活した。この現象は、その後下火になったが、2006年になると、6月に開催されるワールドカップでのアピール狙いで再燃した。

2.3 政治の視点から

EUの行方を占うポイントの一つは、06年にフランスとオランダの国民投票で批准が否決された欧州憲法の内容である。憲法草案はジスカール・デスタン元仏大統領が議長を務める諮問会議でまとめられた。内容は加盟各国の利害の調整を前提にしているから、煮え切らない部分もあるとはいえ、全体としては「ヨーロッパ連合」および「ヨーロッパ人」に主役を演じさせる格調高いものである。しかしこのような理念・理想が国民投票で一票を投ずる、いわばヨーロッパ市民になかなか浸透しないところが悩みである。

欧州憲法が特に気にかけている問題の一つがナショナル・アイデンティティである。つまりEU市民としてのアイデンティティを強く主張すれば、ドイツをはじめとする加盟各国のナショナル・アイデンティティを曖昧なものにし、反発されるのではないかという問題である。これに対しEU憲法はI-8で「多様の中での一体化」(in Vielfalt geeint)を謳っている。これはゲーテの「国民文学の基礎にたつ世界文学」の理念に通じる。しかし世界文学の場合は理念・理想でよいかもしいが、現実の政治の場面では観念的でありすぎる。そこでI-10においては「EU市民は加盟国の国籍を保持する。EU市民であることは国籍にとって替わるのではなく、それに付け加わるのである」と具体的になった。いや、すでに前文において「ヨーロッパ諸国民は彼らのナショナル・アイデンティティと歴史を誇りとし、かつての対立を克服し、ますます緊密に一体化させて、彼らの運命を共に形成する」とある。前半で各国のナショナリズムに配慮しながら、後半では国際主義を明示している。現実問題として、どういう舵取りをするのか、難しいところである。さらにII-82には、「(ヨーロッパ)連合は文化、宗教、言語の多様性を尊重する」と書かれており、EU脱退についてはI-60に、あっさりとして「すべての加盟国は、憲法の規定のもとづいて、連合からの脱退を決定することができる」と規定されている。

人間も国家も自己同一性、自己存在の証明をもとめる。この自己同一性がアイデンティティである。ところで自己同一性が成り立つためには、他者あるいは共同体が暗黙の前提で、これがなければ、また、これに認められなければアイデンティティは成立しない。そこで他者、あ

るいは共同体を成立させることが当然要請される。これがドイツの場合には、まずはEUであり、ドイツのナショナル・アイデンティティの行方はEUの行方と密接な関係を持つことになる。

最近ではイラク戦争やトルコの加盟問題を契機として「EUのアイデンティティ」という新たな考え方が急浮上してきた。これは分裂と統合を繰り返し、かつ何度か異教徒の侵略を受けたヨーロッパにとって、目新しいことではない。しかし、この件はドイツ(および他の加盟国)のナショナル・アイデンティティの行方に大きな影響を与える可能性が高い。なぜならEUのアイデンティティが危機にさらされ、これが前面に出てくると、当然ながら、加盟各国のナショナル・アイデンティティの要求は、背景に退き、顕在化されにくくなるからである。

3. フランスの場合

山内 淳

フランスの絶対王政は、16世紀初頭のフランソワ1世(在位1515-1547)の治世から始まるというのが、今日多くの歴史家たちの共通した見解である。この王は、イタリアからレオナルド・ダ・ヴィンチ他の芸術家たちを招きルネサンス文化の導入と保護育成に努めたが、一方で政治的にも非凡な才を示した。たとえばそれまでのラテン語に代えて公文書すべてをフランス語で書くことを定めた「ヴィレール・コトレ法」は、一見言語の実情に合わせた表記上の問題にすぎないように思われるが、実はローマカトリックの普遍主義に対抗する、フランスの一国家としての強い意思表明でもあった。

フランソワ1世は、対外的にはヨーロッパ最強の国を目指しながら、内政においてもそれまでの制度上の矛盾の解消に努めた。彼はルイ12世とブルターニュ公国の女公でもあるアンヌ・ド・ブルターニュの間の娘クロード・ド・フランスと結婚していたが、ルイの急逝により、フランス王の地位に就いた。その前年にはクロードの母親のアンヌはすでに他界しており、クロードがブルターニュ公国の後継者となっていたのだが、ルイが亡くなると新王は妻に公国の継承権の譲渡を求め、妻も抵抗することなくそれに従った。さらにフランソワのあとの公国の継承権は、それまで次男と定められていたのが、今後は王太子である長男へと移った。つまり、ブルターニュ公国の実質的な併合である。ただ法的には、1532年が王国と公国の正式な「統一」の年となる。

こうしてブルターニュ公国は、フランス王国の一地方となっていくのだが、公国の租税、法律、宗教などの特権は認められ、フランス大革命まで保持された。それでは何ゆえブルターニュだけが、このような特権を長い間持ちえたのであろうか。そこには、フランスのまさに国

家としてのアイデンティティに関わる問題が含まれているのである。

今のブルターニュ地方には、先住のケルト系ガリア人が住んでいたことは確かだが、彼等はカエサル遠征以来ローマ化され、フランスの他の地域と同様、ガロ=ローマンの文化を形成していた。しかしローマ帝国の衰弱と軌を一にするかのように、5世紀以降ブルターニュには、イングランドのコーンウォールやウェールズから、アングロ=サクソン族から逃れてきたケルト系ブリトン人が大挙して移住を始めた。一度大陸から島に移り住んだ人々が、再び大陸に戻ってきたのである。定住化は9世紀頃にはほぼ完了し、この頃ヴァンヌ周辺を統一したノミノエから、ブルターニュの国としての歴史が始まったと言われる。

ブルターニュにケルト系の住民が移り住んだことで、大陸ではすでに形骸化していた古の習慣も再び見られるようになった。だが、彼らが西方から大陸に移住を始めた時期というのは、同じく東方のゲルマン人たちもガリアの地に向かって移動を始めた時期でもある。結局フランク族のクロヴィスが、現在のフランスの直接の起源ともなるフランク王国を建設していくが、ローマ、ゲルマン、ケルト系の人々の民族間の争いはしばらく続いた。

フランク王国がメロヴィング朝そしてカロリング朝と変わっていく間に、9世紀には本格的なバイキングの襲来があり、フランク王国それに続くフランス王国は弱体化した時期もあったが、国家としての核は維持された。ブルターニュもまた英仏両国の間で独自の発展を遂げていき、百年戦争後はかつてないほどの繁栄の時期を迎える。だが英仏に対抗し繁栄を誇っていたブルターニュの栄華も、フランス絶対王政を目指すフランス王ルイ11世、そして息子のシャルル8世との戦いで終焉が近づく。

ブルターニュ公国とフランス王国の最大の戦いは、1488年7月にサン=トールバン=デュ=コルミエで展開され、ブルターニュ公国は大敗を喫した。大公は戦いの直後に亡くなり、公国を引き継いだのは、当時11歳のアンヌ・ド・ブルターニュだった。

壊滅的な敗北の前に、ブルターニュはフランスからの数々の要求を呑まざるをえなかった。最大の問題は、女公アンヌとフランス王シャルル8世との結婚だった。しかしブルターニュが拒否できるはずもなく、アンヌはブルターニュ公国という持参金をもってフランス王のもとに嫁いだ。だが結婚後も、実質的な支配権は別として、公国の主は依然としてアンヌだった。

二人の結婚生活は、シャルル8世の急死によって終わりを告げる。後継の王はルイ12世だった。そしてアンヌはこの王と再婚し、二度目のフランス王妃となる。

アンヌの再婚により、ブルターニュ公国は多くの権利を回復した。またフランス王国も、アンヌが他国の王と

再婚して公国を手放すという心配はなくなった。しかしアンヌは、フランス王妃でありながら、公国の完全な独立のために多くの策を講ずる。最大の希望は娘クロードが神聖ローマ帝国の後継者と結婚することだったが、国王側もまたそれに対抗し、結局クロードは王家の一員であるフランソワ・ダングレームと結婚し、公国はそれ以降フランスに併合されていくのは前述したとおりである。

だがブルターニュの人々のフランスからの独立の夢は、それから500年近くたった今もまだ完全に消えたとはいえない。フランスに統一されてからの経済的な沈滞や、あるいは後進地域とみなされて受けた様々な屈辱的な思いなどその原因は様々だろうが、パリの権力に反発するケルト人としての矜持がその背後に存在することは確かだろう。

フランスはその国家形成の初期から、複数の民族の融合の上に成り立ってきた国である。しかし我々がフランスを語る時、ともすればローマとゲルマン二つの民族の功績だけで事足りるとする傾向があるが、フランスの基層文化として、先住の民であるケルトの文化を見逃しては、現在のフランスの国家としての本質を見誤るだろう。

フランスはアンシャンレジームそして大革命の時代を経てきたが、目指してきたのは常に強力な中央主権国家だった。しかし一方この国は、フランス語の他に、複数の言語が日常的に使用されている多言語国家でもある。現代の移民問題は別としても、パリ周辺とは異なる伝統をもつ文化圏がいくつも存在し、たとえばコルシカ島のように、フランスからの分離独立を現在も強く主張する地域も忘れてはならない。ブルターニュでは独立運動こそ最近下火になったとはいえ、この地域から発信されるケルト系の音楽の人気やブルトン語の教育熱は、近年ますます高まっている。それは懐旧の念と同時に、中央集権的な政治・文化に対する個の主張を、人々がそこに明確に見出しているからなのだろう。

(補) 毎年8月の1週目、ブルターニュのロリアン市では、国際ケルトフェスティバルが開かれる。アイルランド、スコットランド、ウェールズ、コーンウォール、そしてスペインのガリシア、さらにはアメリカやカナダからも、ケルト民族の末裔を自称する人々が集い、ケルトの音楽や踊りを披露する。それはまさに国境を越えて民族的なつながりを求めた一大イベントであり、現在フランス最大のフェスティバルになっている。

4. アイルランドとウェールズと日本の近代化をめぐる諸問題

中里壽明

イギリスの正式の名称は、United Kingdom of Great

Britain and Northern Ireland であり、周知のようにこの国には異なった4つの「国」があるとしばしば言われてきた。すなわち England, Scotland, Northern Ireland, Wales である。これらの「国」は、イギリスという国を構成する「国」として、それぞれ独自の歴史、文化、言語を持っている。この周知の事実から出発して、「ケルト周縁部」(Celtic Fringe)からイギリスという国の national identity を追求することが今回の課題となった。

national identity とは、いうまでもなく外部から見れば「国民の個性」もしくは「その国らしさ」であり、内部から見れば「帰属意識」もしくは「自己認識」である。それらは政治的であったり、文化的であったり、歴史的であったり、社会的であったり、個別的であったりする。主として Raymond Williams 以来の Cultural Studies の諸文献の調査によれば、これら文化的な national identity は、外部から見た場合ほとんどが虚偽のイデオロギーであり、いわば見られることを予期した観光用のイメージであった。しかし、内部から見た「帰属意識」「自己認識」としての national identity をよく調べてみると、特にアイルランドの場合、次のようなことがわかった。

アイルランドのナショナル・アイデンティティ (民族主義) は、しばしばイギリスのナショナル・アイデンティティ (民族主義) との関連で生じ後者の修正もしくは写しとして現象してきたという歴史的事実である。一般的に言って単一の文化と平等=均質な国民という幻想は、差異化と差別の構造によって生み出され、それを生み出した差異と差別の構造を覆い隠す。ナショナル・アイデンティティの形成に差異と差別が不可欠なのは、例えば米国におけるワスプの文化形成には黒人やヒスパニックや先住民が必要であったし、日本の近代国家のアイデンティティの形成には台湾人や朝鮮人やアイヌや被差別民の存在が必要であったことがよく示している。20世紀になって事態はさらに進む。文化的なアイデンティティは今日歴史の概念形成には不可欠のように思われるが、元来フロイトに由来するこの心理学的概念が政治用語に転用されてナショナル・アイデンティティとして語られるときには、逆に19世紀的な近代国家の概念が危機に瀕しているのである。2005年秋にダブリンを中心としたアイルランドの現地調査でこのことを確信した筆者は、2006年夏にカーディフを中心としたウェールズの現地調査を遂行して、再びこの事実を確認した。

ウェールズ民族博物館やカーディフ博物館所蔵の膨大な資料を見ると、ウェールズ人の自己の歴史、言語、文化に対する誇りと保存の強い意志を実感し驚嘆するが、今日再びウェールズ(とスコットランド)で、自治意識、ナショナル・アイデンティティの意識が高まっている背

後には、明らかに「ヨーロッパ共同体」(EC)から「ヨーロッパ連合」(EU)が形成されていく歴史的趨勢が存在する。周知のように日本語の「イギリス」の語源は「イングランド」であり、これはブリテン島南部の名称だ。そのイングランドが長い戦闘の末、1536年にはウェールズを、1707年にはスコットランドを、そして1801年にはアイルランドを併合したが、1922年になるとアイルランドが独立し、1974年にはプロテスタントの多い北アイルランドが統治下に戻って、現在のイギリスの形になった。20世紀も末になると事態はさらに進むことになる。北アイルランドの独立運動はよく知られているが、スコットランド、ウェールズにも独立を望む人々は多く、1997年にはついに両地域の住民投票により独立議会の設立が認められ、1999年7月には、それぞれエジンバラとカーディフに議会が開設された。このようなイングランドの「周縁・地方」の自治意識の高揚は、何よりも、グローバル化していく資本主義によって19世紀以来の「近代国家」の枠組みが揺らぎはじめ、これらの「周縁・地方」がイギリスという近代国家の枠組みから外れてもヨーロッパという共同体の中で充分アイデンティティを維持できるようになったことを示している。このような歴史の流れは、元々独立意識が強かったイタリアの北部地方やスペインのカタロニア地方における新たな独立運動の展開にも当てはまるし、チェコやユーゴの「周縁・地方」においても当てはまる。米・日・EUというグローバル化していく世界経済の三極構造において、ヨーロッパという共同体を形成することによって、もはや近代国家としての個別的な統合を必要としなくなった「地方・周縁」の新たな形のナショナル・アイデンティティこそが今日問題になっているのである。

以上の研究調査の下に、筆者は次の五本の研究論文を執筆した。

1) 「都市と文化—『ヴェニス商人』の表象するもの」(『東アジア日本語教育・日本文化研究』, 第九輯, 東アジア・日本語教育・日本語研究学会, 2006年3月刊), 120頁~30頁。

*人種という疑似生物学的な概念によらない人種差別、つまり「文化主義」的な人種差別のプロトタイプになったのは、ヨーロッパでは、反ユダヤ主義であった。シェイクスピアの有名な喜劇 *The Merchant of Venice* には、ポーシャの雄弁なパロール、レトリックの背後に、もう一つのシェイクスピアのレトリックが存在する。本論文は、これらのレトリックを読み解くことで、都市文化の中で常に周縁的な位置しかあてがわれない他者、多層的な二項対立の強制を強いられる他者の問題を浮き彫りにした。

2) "Irony and Paradox in *The Merchant of Venice*,"

in *International Cultural Expression Studies*, No. 2 (The International Society for Cultural Expression, March, 2006), 123-30.

* 1) を下に訂正補筆し、新たに英語で発表した。

3) "Shuich Kato and Roland Barthes" in *ISCE News*, Vol. 23 (The International Society for Cultural Expression, April, 2006), 8-10.

* 身体表現のアイデンティティを加藤周一とロラン・バルトの見解を対比させて考察

4) 「海外出張報告：地方調査1(ウェールズ)」(日本大学生物資源科学部人文社会系紀要『人間科学研究』第四号所収, 2007年3月刊予定)。

* ウェールズ地方のイギリスにおけるアイデンティティの変容の調査報告。

5) 「歌舞伎と日本の近代化」(東アジア日本語教育・日本文化研究学会国際学術大会で口頭発表, 2006年11月11日~12日, 韓国済州大学), 2007年3月刊予定の『東アジア日本語教育・日本文化研究』第10輯に掲載。

* 西洋からの視点に偏することなくアジアからの視点から、ナショナル・アイデンティティの行方を日本の近代化と歌舞伎の関係に絞って考察。

5. The Case of Northern Ireland

Noboru Fukushima

We are fated to live in the global age of the 21st century, but National Identity is still the mainstay of national order in the world. However, racism and prejudice against religion and different cultures are reigniting nationalism. Deconstruction of National Identity must face such severe problems worldwide. As seen in the European Union, the discussion about National Identity in the global age strongly depends on what standpoint people take. There are also some people who consider this strange phenomenon to be trifling. The reason they think that the issue of National Identity is peripheral is that National Identity is represented in the national anthem, national flag, parades, coins, folk costumes, and so on.

National Identity is not a major issue in most countries; however, extreme tension often arises in countries where National Identity is stifled. What does National Identity mean to us? To think about this question is essential to be able to critically discuss the relationship between a nation and a society, and the relationship between a nation and an individual.

Problems about National Identity may be discussed

from historical, political or philosophical perspectives. However, to analyse National Identity from the perspective of literature, this paper focuses on Joan Lingard's (1932-) pentaptych (*Twelfth Day of July*, 1970, *Across the Barricades*, 1972, *Into Exile*, 1973, *A Proper Place*, 1974, and *Hostages to Fortune*, 1976). Lingard lived in Belfast, Northern Ireland from the age of 2 to 18, where ethnic and religious conflicts have long been a feature of life until recently. Presently, Lingard lives in Edinburgh, Scotland. National Identity in Belfast is not as evident as one would expect because two sides – Catholics and Protestants – are struggling for recognition. On the fringes of the United Kingdom and the Irish Republic, the problem of National Identity remains a point of contention.

Twelfth Day of July: Lingard, the Irish author, gives a description of the situations of two young teenagers in Belfast, living in nearly adjacent neighbourhoods, who couldn't live further apart as for National Identity. Heroin, Sadie Jackson, and her brother Tommy are destined to live in the Protestant area of town, while hero, Kevin McCoy, and his younger sister Brede are fated to live just a few blocks away in the Catholic neighbourhood. See Figs. 1 and 2. Shortly before 12 July, a very significant day for the Protestants since William of Orange had defeated the Catholic army on this day in 1690, Kevin and his friend Brian scheme to obliterate the picture of William on a Protestant mural.

Sadie and her friends are very angry and seek vengeance by substituting the Republican inscription "GOD BLESS THE POPE" (Joan Lingard, *Twelfth Day of July* (London: (Puffin, 1970), p. 47) for "GOD BLESS KING BILLY", which the Catholics hate most. Sadie is abducted by Kevin who takes her home to terrify her. Then tribulation breaks out. But the struggles between the two groups end suddenly when Brede suffers a serious head injury. Tommy, Sadie and Kevin accompany her to the hospital and spend the next day at the sea. The first book ends with the start of an unusual friendship.

Across the Barricades: Three years have gone by during which Sadie and Kevin didn't see each other. One day, they fortuitously bump into each other again and quickly become friends. They fall in love with each other, similar to Romeo and Juliet, and because of their backgrounds run into a lot of trouble with their families and friends. One evening, Kevin was

walking by a scrapyard alone, and was attacked by three Catholic boys. One of them was his intimate friend Brian. Kevin is knocked flat to the ground, hearing them calling him 'Traitor' (Joan Lingard, *Across the Barricades* (London: (Puffin, 1972), p. 78). Kevin resolves to go to England with a gut-wrenching mind because he can't put up with the everyday conflicts in Belfast anymore. Against all the values Sadie was raised on, she also decides to go with Kevin with the purpose to live a peaceful life.

Into Exile: Sadie and Kevin flee into exile, get married but live in poverty in London. Their problems catch up with them and a great many little arguments make their life depressed. When Kevin's father dies, he has to go back to Belfast to look after his sick mother. Sadie remains in London alone and in the surroundings, unable to talk things out with Kevin, loses her sensibility to cope. When Kevin writes to her that he wants her to live with him, Brede and their mother in the house of Brede's fiancé in the Irish rural area so that he can attend to the old woman, she loses faith in Kevin. Kevin grasps that Sadie can't live with a woman that sees a bloody Prod when she looks at her daughter-in-law and they leave again looking for an untroubled place in Britain. Kevin says to Sadie, 'We could never live here, love. We'd have no chance at all' (Joan Lingard, *Into Exile* (London: (Puffin, 1973), p. 173).

A Proper Place: To seek a proper place, Kevin and Sadie move to Liverpool from London still sharing their unpardonable love. Next, they move from the Liverpool slums to a Cheshire farm. They have no regular work, so they are needy and very poor. But they have the love of their baby Brendan. One day Gerald, Kevin's brother, comes to stay with them due to prominent problems in Northern Ireland. Sadie is worried about Gerald because 'A wild wayward boy, he had been in trouble ever since the current unrest had started in Ireland' (Joan Lingard, *Kevin and Sadie: The Story Continues* (London: (Puffin, 2006), p. 222). Kevin must look after Gerald as his brother.

Hostages to Fortune: Four years have already elapsed since Kevin and Sadie escaped from Belfast. When the death of Kevin's employer confronts him and his wife Sadie with the sudden loss of both job and home, an unpredictable future emerges before them. Though they have brevity and vitality, they have no money, no house and no job. They want to get over the religious

confrontation which the older generations cannot. At the end of the story, they are ready to move into an old house. However, smiling, Sadie says to Kevin: 'It could be a real gas building our own house' (Joan Lingard, *Hostages to Fortune* (London: (Puffin, 1976), p. 170).

These days, we are witnessing a global immigration, which makes the notion of National Identity more and more complex. We are often told that globalism reallocates National Identity giving us a cultural standard. A lot of people hope that globalism will rebuild National Identity accepting the demands of our age. On the other hand, there are people thinking that National Identity has been further spurred by globalism because they believe globalism cannot clear the boundary of language, culture, race, religion and so on.

As we have seen in Lingard's pentptych, it is true that the deconstruction of National Identity is a very difficult issue. Historically speaking, the EU, which the UK and Ireland take part in, will bring about peace for the Protestants and the Catholics, giving the two denominations a chance to coexist in spite of their religion. We hope the EU's political projects for the two religious factions will help to foster a greater friendship between them.



Fig. 1 UVF Mural

Other loyalist murals in the 1980s and 1990s were more threatening. For example, in Mersey Street,

East Belfast, a mural painted in July 1996 shows the silhouettes of three UVF members ready for action. The accompanying slogan reads: 'We are pilgrims, Master; we shall go always a little further'.

Location and Date: Mersey Street, Belfast, 1996 (Contemporary Murals in Northern Ireland-Compiled by Bill Rolston (1998), <http://cain.ulst.ac.uk/bibdbs/murals/slide3.htm> # 3).



Fig. 2 Pro-Agreement Mural

The Good Friday Agreement of 1998 has begun to figure in murals, with demands that the promises of that Agreement for the nationalist population be delivered. For example, a mural painted on Garvaghy Road, Portadown in July 1998 quotes one such promise –'freedom from sectarian harassment'– and juxtaposes this with the threat of unwanted Orange Order marches in the area. Three dancers, signifying Irish culture, are dwarfed by a looming Orange Order member who holds a petrol bomb; the flames from the bottle are red, white and blue, the British colours. Prophetically, this mural was completed two days before three young nationalist children were burnt to death in Ballymoney, County Antrim, by loyalists protesting at the failure of Orange Order marchers to proceed along the Garvaghy Road.

Location and Date: Garvaghy Road, Portadown, July 1998 (See the above web address).

* This paper is partly based on an article by Noboru

Fukushima, "Joan Lingard and National Identity", *International Cultural Expression Studies: Expressions* 3, (Mishima: The International Society for Cultural Expression, 2007).

6 . National Identity in England

Kunishige Hori and Julian Manning

Our research on national identity in England, and by way of comparison, a brief look at the current situation in France, has identified two interrelated areas of interest that frame the current debate in the UK. The first area of interest is the effects on national identities of the European Union (E.U.) and the second is the concept of multiculturalism and its ramifications for national identities.

The first area is the continuing effects of the UK's membership in the E.U. The effort to prod and pull member states into "ever closer union" on the part of pro-European governments, politicians and commentators both within and without the UK itself has had two seemingly contradictory effects.

The first is to encourage citizens of the EU to shift their primary allegiance from the symbols of national identity to new, pan-European symbols of meta-nationalism. Some attempts have met with a degree of success, for example the European Convention on Human Rights is seen by many to define a uniquely European legal framework underpinning a common European civilization that has evolved over centuries and of which the E.U. is a legitimate expression. In legal terms, the UK's identity is increasingly defined in terms of Europe as a whole rather than any uniquely British tradition, and this is not generally considered to be 'a bad thing' by British people.

However, it must also be noted that the E.U. project has often been viewed in the UK as essentially Franco-German inspired, and treated as an attempt by those central powers to assert hegemony over their erstwhile rivals in the name of pan-Europeanism. The development of the EU has, in this regard, acted to reinforce the parochial prejudices of national identification in the UK. Whether one wishes to see the UK's refusal to join the Eurozone or the Schengen area, which shares responsibility for external borders among member states, in this light, or rather, as stated by the UK government, as rational responses to actual conditions, the UK's symbolic resistance to the

non-British standardizing influences of the EU can be seen in the stubborn adherence to imperial standards of measurement, especially miles instead of kilometers, and pints instead of litres. It may justly be concluded therefore that the development of the E.U. has both weakened the nation-states' claims on their citizens' primary identities in some respects, but has reinforced it in others.

The second effect of the development of the E.U. and its acceptance by the majority of the citizens of its member states as a permanent political, economic and cultural fixture of European life has been to make so-called petty-nationalisms more viable than they were in a world of individual nation states.

It can be no coincidence that Scottish, Welsh, Catalanian and Basque nationalism, to name but four, have been resurgent in Europe. The popular appeal of these nationalisms has become more widespread as the economic and political costs of asserting them has fallen, given that all of these nationalists view their proto-nation-states as members of the E.U. and therefore subject to all of the legal, political and economic protections that it offers. The result in the UK has been a (perhaps interim) political settlement called 'devolution' with the setting up of national parliaments in both Scotland and Wales, and a serious multi-national effort to bring devolved government to Northern Ireland.

Another result has been the deconstruction of a pan UK 'British' identity. Increasingly, the symbols of 'British' identity are being questioned. Too often, it is argued, 'British' has meant 'English' in effect, and the sensibilities and cultural differences of the 'Celtic fringe' have been denied and/or ignored. There has been a resurgence of 'Celtic Pride' which has included Scotland, with its well-developed tradition of national myth-making (cf Hugh Trevor-Roper), Wales, Ireland, Cornwall and even Brittany in France. This has forced a rethinking of what English identity might mean, separate from British. Several books on 'Englishness' have been published in the past few years expressing this concern (Paul Johnson, Jeremy Paxman).

The symbols of England, as distinct from Britain, are far more visible today than they have ever been in my memory. However, it is not at all clear that a unified sense of English identity can be agreed upon. This became apparent when a British government

spokesman (Jack Straw as Home Secretary) suggested that immigrants seeking British citizenship should be required to take a test of 'Britishness'. While his suggestion received widespread support in principle, nobody could agree on what questions such a test would ask in order for immigrants to prove that they understood Britain to the extent that they deserved the accolade, 'British citizen'. If British people cannot agree on what it means to be British any longer (if they ever did), then neither can the English. In trying in 1992 to appeal to what is known as 'middle-England', the supposedly solidly conservative core of English voters, then Prime Minister John Major could only resort to stereotypes of warm beer, country churches and village cricket—images that rather than stirring nationalist nostalgia were actually roundly derided by the English themselves.

The second theme, multiculturalism, is the result of past Imperial policy. In the words of an Indian writer, 'the [British] Empire has come home.' Recent events have put the concept of multiculturalism in front and center of the British/English debate on national identity. The suicide bombers who attacked the public transport networks of London on July 7th 2005 (about 1 week before my stay at the Tavistock Hotel, in front of the site of the bus bombing) were British citizens of Pakistani descent. Repeatedly the mass media asked how these people could murder their fellow Britons. The concept of multiculturalism has since been under attack in the UK as having failed, and it is argued that some kind of unified national culture needs to be taught to all citizens. This can be seen as something similar to what happened in France the previous year following the series of riots in the suburbs of Paris by 'unassimilated' immigrants, and indeed was taken by many to confirm the thesis that the whole multicultural experiment in Europe was doomed to fail.

Our research indicates, however, that at least two versions of multiculturalism coexist in the UK. The first might be termed the official version, which might be summed up in the phrase 'separate but equal'. This is the idea that each culture is a reified and bounded object consisting of identifiable practices and products. As such, each of these 'objects' is equally worthy of legal protection and equal respect. In representing these cultures in private or public it is assumed that the prescribed forms of practice and production that

are taken to define the specific culture are adhered to. Enjoying the benefits of cultural diversity is taken to mean enjoying the right to act in specifically culturally defined manners. For example, a celebration a Caribbean culture under this definition of multiculturalism, expect to (re)produce any number of practices and products from a defined canon, such as steel-drum bands, soca music and rice 'n' peas.

A celebration of the Indian festival of light (Diwali) in the UK would be expected to mimic the rituals of the homeland, India, regardless of the place of birth of the participants performing the festival.

The second form of multiculturalism exposes the first as being prescriptive and didactic. The second (and I might say, true) form of multiculturalism that is so obvious on the streets of a city like London, is the result of spontaneous interaction of those from various backgrounds who nevertheless share a common place and time. It is not planned, it is not taught, it is not teleological. It is the culmination of accumulated experience, some shared, some diverse, to produce cultural practices and products that are often entirely without direct precedence. We might term this as being atavistic cultural production, harking back to a time before cultural boundaries and ethnic boundaries became fixed under ideologies of nationalism and imperialism.

Our research focused on Europe's largest street carnival, the Notting Hill Carnival in London. I would site the current carnival as a prime example of the second type of multiculturalism mentioned above, despite pressure from local government authorities and pedagogues who would seek to impose their own vision of the first kind of multiculturalism. Our interview with the London Authority's Head of Equalities and Policing, Rosemary Emodi, herself a London born and raised woman of Nigerian immigrant parents, showed clearly how the London government authorities viewed the Notting Hill Carnival with disdain as a cultural exhibition (although they desperately desired to tap into the carnival's economic power) and exposed their didactic view of multiculturalism.

The carnival was started in the late 1950s by recent immigrants from Trinidad & Tobago living in the then impoverished region of north-west London, Notting Hill in response to race-riots that had erupted in London in 1958. The original plan was many-fold. The carnival would both promote and protect the

culture of the Carribeans in the face of pressure to assimilate; it would provide a community focus (around the Mangrove Community Centre which organized the festival) for recent immigrants; it would provide a sense of ethnic solidarity; it would provide an organized forum through which the authorities could be addressed. It was designed to focus on the positive aspects of carnival, colorful costumes, Caribbean musical performance and dance and Caribbean style foods. From very small beginnings, the carnival has grown into a massive 3-day event, the biggest street festival in Europe, and perhaps only smaller to the original carnivals in Trinidad itself and in Rio de Janeiro. However, as it has grown, and as the needs of immigrants have changed and memories of the home countries dissipated as more-and-more generations are born and raised in the UK, the festival has changed in nature.

Although the costumed parade still exists, it is no longer the main focus of the carnival. Neither is live musical performance. Today the focus of the carnival is the so-called sound systems. DJs playing recorded music influenced by the club scenes of Jamaica and, of course, London itself. In other words, the festival has developed into a uniquely London event. The only culture on display is truly hybrid, it is the defining culture of what it means to be a citizen of a multicultural city such as London. I believe it would be difficult to site a better example of the second type of multiculturalism above. It is also, in contrast to recent criticism of the first type of multiculturalism, an undoubted success in political, economic and cultural terms. This, to many Londoners, is the type of event that defines what it means to be a Londoner today. London is a large enough city to generate culture and identity quite independently of the nation (England or the UK).

Given the first theme of the fracturing of national identity in the UK and the alleged failure to find mutually acceptable alternatives, it could well be that identities will be worked out on the streets, often in the face of prescriptive norms handed down from above. Multiculturalism in Europe may be a failed experiment by the standards of official Europe—in the case of the UK it seems pointless to argue that immigrants should assimilate when nobody agrees as to what exactly they should assimilate to—but multiculturalism is not ‘separate-but-equal’, it is the

living, breathing creation of new cultures, new identities through the ongoing processes of social production and reproduction. The Notting Hill Carnival is an empirically verifiable example of multiculturalism at work today in London.

7. 韓国・台湾の場合

館野正美

7.1 はじめに

日本の隣国、台湾と韓国における、ナショナル・アイデンティティの行方の研究を、主に文化現象としての人々の意識の視点から行った。その際、台湾においては主に国立台湾大学の教授達や大学院生たち、また韓国においてはソウル国立大学校の教授達・或は韓国学研究所の教授達等に対するインタビューの結果をも踏まえて考察を行った。

かくして、時代の変遷とともに近年とみに変化しつつある、我々日本も含めた、東アジアの国民としての意識の変化を、過去から現在にわたって総合的に精査することによって、日本を含めた東アジアの各国の行方を予知し、些かなりとも今後の世界情勢の変化に対する対応の指針を示してみたいと思うのである。

7.2 台湾の場合

台湾は、中国大陸福建省の東南海上に浮かぶ、面積3万6千平方キロメートルの美しい(formosa)島である。この島が始めて歴史に登場するのは、『三国志』「孫権伝」に、「呉の黄竜2年(紀元230年)衛温と諸葛直が軍隊を率いて夷洲に至った」という記述の「夷洲」が台湾のことであるという。また、これより以前、秦・漢の時代においては、台湾のことを「東鯤」と言ったという説があるが、真偽のほどは定かでない。

この台湾には、大きく分けて2つの系統の人々が居住する。すなわち、①本省人(大戦以前からの住民=先住少数民族九部族+漢族系(閩南系+客家系)住民)と②外省人(光復(日本統治からの復帰)後、新たに中国大陸から移住してきた人々、すなわち、閩南語が分かるというだけで、一攫千金を求めてやって来た閩南人・日本に協力したので「漢奸」の罪に問われるのを恐れて逃げて来た「満州人」・「汪精衛の南京政府」・「冀東政府」の関係者達等々)の2つの系統である。

これら種々雑多(と言ってもは些か失礼な表現ではあろうが)な人々が、しかも度重なる外圧・外国(=台湾独自の支配ではない、という意味で)の支配、すなわち、17世紀に始まる三国の威力(明(1662-1683、実際、鄭成功始め鄭一族の閩南系中国人の支配)・オランダ(1624-1662)・スペイン(1626-1642)の三国)、それに続く清の統治(1683-1895)と日本の統治(1895-1945)

等を受けて、そこに暮らす人々のアイデンティティーは、極めて漠然とした不明確なものになっている、というのが現状である。

例えば、あの二・二八事件の際に、内省人達は外省人を、かつて日本人が中国人を侮辱して使った言葉を以って罵倒した。彼らにとっては、「中国人」すら「外国人」なのである。

持ち前のバイタリティーで、近來の経済成長著しい台湾に住む人々のアイデンティティーは、畢竟するところ「台湾人」ということになるのであろうか。

7.3 韓国の場合

韓国は、檀君王儉による建国神話（一然『三国遺事』）はさておくとして、既に紀元前2世紀の衛満朝鮮の時代から、小さくとも1つの「国家」として、当時の中国である漢との攻防を繰り返し、紀元前108年、王儉城の陥落により、一旦は漢の支配下に収まるが、ほどなくこれを排撃した高句麗を始めとする、いわゆる「三国」（高句麗・百済・新羅）から渤海・高麗・朝鮮王朝（李朝）と、常に中国の影響・圧力をうけつつ、また一時期日本の統治を受けながらも、一貫して独自の「国家」としての歴史を築いてきた。

今これを許浚が編集した医学全書『東医宝鑑』（1610年刊、全25巻、内景篇（外見的には見えない体内の病状についての記述）・外形篇（外科・眼科・皮膚科等の疾患についての治療法）・雑病篇（治療の理論と種々の疾患についての詳論）・湯液篇（『本草綱目』の重要な部分+筆者の独創的見解）・鍼灸篇に分かれる）において特徴的に捉えてみたい。すなわち、この1書は、上記の如く、中国の医書に学びつつも、単なる寄せ集めでない、独自のアイデンティティーを持った集成であり、わが国の『医心方』（丹波康頼編、984年刊、全30巻、隋の『諸病源候論』によって病名を分かち医学全般を包括し本草・養生・房中に及ぶ、ほぼ中国六朝・隋唐・朝鮮医薬学書からの引用からなる、梶原性全（14世紀ころ）の『頓医抄』・『万安方』等の先駆けとなる）と同様な一大成果である。いずれも、自己の明確なアイデンティティーを持った仕事である。

要するに、韓国人には、極めて明確な自我の意識としてのアイデンティティーがあり、それがこの国の発展にも大いに寄与して現在に至っていると思われるのである。

7.4 まとめ

以上、日本に最も近く親しい両国の、しかし両極端ともいえる、国民のアイデンティティーについて垣間見た。いずれかと言えば、我々日本人のアイデンティティーは、韓国人のそれに近いように見受けられるが、それぞれ独自のアイデンティティーを知り合い、理解し合って、21世紀のグローバルな東アジアを築いて行くことが肝要な

のではないだろうか。

8. イギリスの場合

楠家重敏

平成17年度に楠家は夏休みを利用して、イギリスのロンドン、オックスフォードを中心に調査をした。主な目的は、明治期のイギリス人日本学者 W.G. アストンの事跡を後付けることによってイギリスのナショナル・アイデンティティーの行方を追うためである。明治時代のイギリス人日本学者といえば、まずサトウ、チェンバレン、アストンの名前が浮かぶ。サトウ研究にはイギリス国立公文書館のサトウ文書、チェンバレン研究には愛知教育大学のチェンバレン・杉浦文庫という拠点があり、現在、二人の伝記的研究はかなりの進展をみせている。ところが、アストン研究には日記とか書簡といった私的な史料が少ないため、これまで十分に研究が行われなかった。そこでまず、楠家はイギリス国立公文書館のサトウ文書を調べた。ここではサトウがアストンに宛てた書簡120通ほどを披見した。これを解読したのち、そこから得られたデータをもとに、イギリス各地に調査に向かった。ロンドンでは1872（明治5）年に岩倉使節団が訪英しており、アストンは接待係をしていたが、そのおり彼が住んでいた住居を尋ね当てた。アストンはオックスフォードのピットリヴァース博物館に日本の仏教関係の遺物を寄贈している。楠家は同地でそれがいかなるものかを精査した。ついでケンブリッジ大学総合図書館のアストン・コレクションの一部を調べた。すでにこのコレクションには林望他編「ケンブリッジ大学所蔵和漢古書総合目録」なる書誌があり、楠家はこれを手に持って、アストン旧蔵の和書の若干をリサーチした。さらにアストンの誕生地ベルファストや隠棲地ビアーを訪ねた。ベルファストではアストンの母校クイーンズ・ユニバーシティで彼の成績表などを手にしてみた。ビアーではアストンの墓標を書き写した。これらの調査のほか、楠家はロンドン、オックスフォード、ケンブリッジ、ベルファスト、ビアーの各地でイギリス人にインタビューをして、彼らの日本観を調査した。こうした成果をもとに、楠家は平成17年10月に『アストン——日本と朝鮮を結ぶ学者外交官』（雄松堂出版）を刊行した。本書はイギリスのナショナル・アイデンティティーの行方を一つの角度から推定するにあたり、大きな示唆をもたらしたと自負する。

平成18年度にふたたび楠家は夏休みを利用して、イギリス各地を歴訪した。この年の目的は1872（明治5）年に訪英した岩倉使節団の足跡を辿ることであった。リバプールでイギリスの土を踏んだ岩倉一行はイギリス外交官アストンの案内で、まず彼らのイギリスでの拠点となるロンドンに入った。岩倉らはイギリスの文物をつぶさ

に調べ、これを日本の近代化に役立てようとした。郵便局、銀行、各種の学校施設、各種の工場などは彼らの格好のモデルであった。さらに明治初年の段階において、欧米各国でどのような日本製品が売れるのかをリサーチした。このデータをもとに、明治政府は1872(明治5)年に日本米の輸出に踏み切った。中国、サンフランシスコ、シドニー、ロンドンが販売先になった。これ以来、明治20年代なかごろまで、コメは日本の主要輸出品になった。さらに外国で日本茶が愛飲されている事実を知る。日本茶の輸出は1860年代より始まり、生糸とともに主力輸出品であった。1874(明治7)年より輸出促進のために紅茶の製造が明治政府の手によって開始されたのも、岩倉使節団の欧米見聞の成果といえよう。また、西欧の新聞に登場する日本情報には誤解が多く、とりわけ貿易事務にその影響が大きかった。そこで欧米に日本国内の経済状況を理解してもらうために、明治政府は横浜の英字新聞 Japan Weekly Mail を介して日本紹介を行うことにした。いっぽう、岩倉一行は意外にも日本の書画骨董がイギリスで多く保存されている事実を知る。ロンドン塔には1673年にリターン号が日本に來航の際に江戸幕府から贈呈された甲冑が保管されていた。大英博物館にも膨大な量の和書が所蔵されていたが、これはケンペルやシーボルトの旧蔵書であった。楠家はこうした岩倉使節団の一連のイギリスでの「日本発見」の事実を詳しく調べた。その成果は近日中に公表するつもりである。これらとともにイギリス滞在の日本人から彼らのイ

ギリス観をインタビューし、ナショナル・アイデンティティーの行方を探った。

謝辞

本報告は、平成17年度、18年度の2年間にわたる、日本大学学術助成金(総合研究)の助成を受けて行われた研究成果報告である。

注

- 注1) 油井大三郎・遠藤泰生編『多文化主義のアメリカー揺らぐナショナル・アイデンティティー』(東京大学出版会, 1999年)
- 注2) サミュエル・ハンチントン著(鈴木主税訳)『分断されるアメリカ』(集英社, 2004年5月)
- 注3) Sollors, Werner. "National Identity and Ethnic Diversity: 'Of Plymouth Rock and Jamestown and Ellis Island'; or, Ethnic Literature and Some Redefinitions of America." Ed. Geneviève Fabre and Robert O'Meally. *History and Memory in African-American Culture*. New York: Oxford UP, 1994. 92-121.
- 注4) Merelman, Richard M. *Representing Black Culture: Racial Conflict and Cultural Politics in the United States*. New York: Routledge, 1996.
- (H 19. 1 .17 受理)

